

えん麦品種「ホナミ」について

誌名	北海道農業試験場彙報
ISSN	00183415
著者名	熊谷,健 田端,聖司 佐々木,正剛 山本,正 後藤,和男 石丸,良博 三浦,梧楼 林,満
発行元	北海道農業試験場
巻/号	85号
掲載ページ	p. 40-50
発行年月	1965年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



えん麦新品種「ホナミ」について

熊谷 健¹⁾ 田端 聖司¹⁾ 佐々木正剛²⁾ 山本 正³⁾
後藤和男³⁾ 石丸良博⁴⁾ 三浦 梧楼⁵⁾ 林 満⁶⁾

A NEW OAT VARIETY "HONAMI"

By Takeshi KUMAGAI, Seiji TABATA, Masayoshi SASAKI,
Tadashi YAMAMOTO, Kazuo GOTŌ, Yoshihiro ISHIMARU,
Goro MIURA and Mituru HAYASHI,

I は し が き

本品種は、昭和34年11月に(春播えん麦農林2号)として新品種に登録「ホナミ」と命名され、北海道一円に適合する奨励品種に採用されたものである。近年「ホナミ」の幅広い適応性が広く認められ、次第に作付け増加の傾向を示している。ここに、この品種の育成経過および特性概要について記し参考にと供したい。

この系統は新品種決定までに17年の歳月を経過し、その間数回にわたり試験体制の変更を余儀なくされた。これに伴って数多くの担当者が各世代の育成を分担実施したわけであるが、とくに初期世代の選抜、養成にたづさわつた北川吉道、児玉務(元札幌農事改良実験所)、大堀信雄、市原義雄(元当場種芸科)、各技手、戦時下労力不足の際に中間世代の育成を担当した故辺見達彦技官(元当場えん麦、らい麦指定試験地)および後期世代の育成ならびに新品種決定までに努力した伊藤三郎、小池稔子(元当場畜産部)、各技官に対して深甚の謝意を表す。

また、本品種の飼料価値の検定は畜産部元飼料化学研究室が担当され、地域適応性の検定には、各道立農試担当者の絶大なる御協力を頂いた。記して衷心より感謝の意を表する次第である。

II 育種目標と育成経過

えん麦の栽培上特に問題となるのは倒伏による被害である。とくに収穫期以降の多雨を伴つた不順な気候においては、はなはだしく倒伏を生じ、著しい減収をもたらす。このことは全道の問題であるが、地域的には根刈、天北地方がとくにはなはだしい。これらの地方では強稈性品種が強く要求される。

1) 作物部 作物第7研究室, 2) 同 作物第3研究室 3) 同 作物第4研究室, 4) 元北海道農事試験場種芸科(現北海道立農業技術講習所), 5) 元札幌農事改良実験所(現雪印種苗株式会社), 6) 草地開発部 草地第3研究室

代表品種「ビクトリー1号」は大正年間に出された古い良質性の品種で地域適応性が高く、全道一円に栽培されている。しかし、本品種は収量が低く稈が弱く倒伏しやすいのが欠点とされている。そこで本品種の形質改良をねらいとして育種計画が立てられた。すなわち、「ビクトリー1号」の高い適応性と良質性を保持して、耐倒伏性を強化し、さらに収量性の向上を計ることを主要目標として交配組合わせが検討された。母親に用いた「黒実」は黒色の稈色を有する根刈地方に適応する高度の強稈性品種であり、その優良因子を「ビクトリー1号」に導入して多収強稈性の系統作出が行なわれた。

このような組合わせで育成された「ホナミ」の耐倒伏性をみると片親の「ビクトリー1号」より明らかに上回っているが、強稈性品種の「黒実」の水準には達しなかつた。当初の育種目標である強稈性の導入が十分に達成されたとはいえない。選抜過程において別途に耐倒伏性を重視した検定方法が採られるべきであつたと反省される。また、出穂成熟が両親よりも遅延し晩熟性であることは、品種配合の面では有利な特性といえるが、成熟時期の北海道の気象を考えると倒伏に対する安定性強化という点ではむしろ好ましくないように考えられ今後の改良点とされよう。

育成経過は第1表に示すとおりである。以下各世代の概要を記述する。

1942年(昭和17年)、當場において交配が行なわれ、交配作業は高湿度のガラス室内においてなされた。

F₁: 両親とともに6個体を一本植えとしる個体を採種して翌年の試験材料とした。F₁の穂型は「黒実」型で稈も「黒実」に似てすこぶる強剛であつた。

F₂: 1840個体を栽培した。稈色の分離はかなり著しかつた。稈が太く穂の大きい淡黄色の稈色をもつ「ビクトリー1号」型43個体を選抜した。

F₃: 供試45系統は一般に短稈多収型でそれらのうち

第1表 育成経過一覽

年次	世代	供 試			選 抜			試 験 場 所
		系統群数	系統数	個体数	系統群数	系統数	個体数	
1942	交 配							琴 似 (当 場)
'43	F ₁	—	—	6	—	—	3	" (")
'44	F ₂	—	—	1840	—	—	43	" (燕麦らい麦指定試験地)
'45	F ₃	—	43	—	—	5	14	真駒内 (")
'46	F ₄	5	14	—	4	4	20	琴 似 (")
'47	F ₅	4	19	—	2	2	6	" (札幌農事改良実験所)
'48	F ₆	2	6	—	1	1	4	" (")
'49	F ₇	1	4	—	1	2	13	" (")
'50	F ₈	2	13	—	1	2	10	" (当 場)
'51		試験縮少のため供試せず						" (")
'52	F ₉	2	10	—	1	2	10	" (")
'53	E ₁₀	2	10	—	1	1	5	羊ガ丘 (")
'54	F ₁₁	1	2	—	1	1	5	" (")
'55	F ₁₂	1	5	—	1	1	5	" (")
'56	F ₁₃	1	5	—	1	1	5	" (")
'57	F ₁₄	1	5	—	1	1	5	" (")
'58	F ₁₅	1	5	—	1	3	15	" (")
'59	F ₁₆	3	9	—	1	2	10	" (")

とくに1系統は稈がやや太くて強く、1穗重が大で脱粒し難くきわめて有望であることが認められた。

F₄ : 5系統群14系統を栽植した。供試系統は稈長は中位、穂が長くかなり強稈であることがわかった。また、中にかなり多けつ型のものも見いだされた。

F₅ : 4系統群19系統を供試した。粒着は疎であるが早熟多収型の系統が見いだされた。一般に強稈良質系統であつた。しかし、まだ一部の系統は稈色分離がみられ、褐色性個体が見いだされた。なお、本世代から生産力予備試験が行なわれた。この試験にはとくに有望視された2系統群が供試された。これらのうち、一系統群は褐色の稈色個体の分離がみられ、草丈もかなりヘテロで粒着は疎、やや穂数が少なく、稈の性質は「ビクトリー1号」程度であつた。その選抜系統に対してそれぞれ(本系2号)(本系41号)の系統名が附された。他の一系統群は早熟多収型で良質と認められ、とくに系統選抜の結果(本系3号)の系統名が附与された。この系統は、後に品種「シロミ」(春播えん麦農林1号)として命名登録されたものである。以上述べた諸系統が「ホナミ」の兄弟系統に当たる。

F₆ : 6系統群が供試された。選抜系統は、「ビクトリー1号」型でやや短稈で収量が多く稈率が低く品質が良好で稈色分離は認められなかつた。(本系68号)の系統名が附された。また、四つの兄弟系統にもそれぞれ系統名が附された。

F₇ : 1系統群4系統を供試し2系統13個体を選抜

した。一方、生産力予備試験の結果から、本品種は「前進」程度の収量性が確認された。

F₈ : 2系統群13系統を供試した。生産力検定予備試験によつて前年度と同様本品種の収量は「前進」を上回つた。

F₉ : 1951年(昭和26年)は試験体制整備のためやむを得ず、試験規模を縮小することになり、本系統の供試は1年延期された。1952年(昭和27年)に2系統群10系統の育成試験が行なわれ、同時に本系統は正式に生産力検定本試験に編入して本格的に収量調査が進められることになつた。一方、別途に、冠状銹病および、葉枯病に対する耐病性検定試験が行なわれた。

F₁₀ : これまで琴似において継続施行された育成試験は本世代より、羊ガ丘(当場畜産部)圃場に移された。2系統群10系統を栽植し、1系統5個体を選抜し前年度に引続き、生産力検定試験が継続された。

F₁₁ : 育成地における系統育成試験および、生産力検定と並行して道立天北農試(元支場)および、十勝農試(元支場)の道内の試験機関に新たに種子を配布して、地域適応性の検定が開始された。

F₁₂ : 1系統群、5系統の系統育成試験ならびに生産力検定試験が継続された。地域適応性検定試験には北見農試(元支場)が追加された。

F₁₃ : 1系統群5系統を供試し、1系統を選抜した。従来の生産力検定試験に加えて新たに多肥、少肥、密植、晩播の栽培法を異にした場合の適応性の検討を始

めた。なお、本品種の種子は根釧農試(元根室支場)に新たに配布された。

F₁₄: 1系統群5系統を供試した系統育成試験とともに生産力検定試験, 各種栽培条件に対する適応性検定試験, 道内試験機関の協力による適応性検定試験がそれぞれ並行して進められた。

F₁₅: 前年と同様に育成試験および各種の検定試験が進められた。地方適否性をさらに確認するため道内18カ所で現地試験が行なわれた。一方, 飼料価値を査定するため畜産部元飼料化学研究室において子実の一般分析が行なわれた。

F₁₆: 前年とほぼ同様な事項について各種試験が重

ねられた。1959年11月, 過去の成績を検討審議の結果, 本品種の優良性が認められ, (春播えん麦農林2号)として新品種に登録され, 「ホナミ」と命名された。「ホナミ」の名称は小穂数が多く, 穂が長く, 豊産で, 穂が波打つ様を表わしたものである。

III 特 性

1. 一般特性

本品種は, 「ビクトリー1号」に比べると, 短稈であるが穂長は長く, 小穂数は多く出穂期と成熟期は2~3日おそい, 千粒重, 粒重はともに下回る。稈率は「ビクトリー1号」より多いが「前進」に比べて約3

第2表 両親との特性比較

品 種 名	稚 苗			稈 穂				芒の有無		子 実		
	姿 勢	葉 色	葉幅	太 さ	強弱	穂 型	疎密	長	短	形状	色	品質
「ホ ナ ミ」	直 立	濃 緑	中	中	強	散 穂	密	少	中	中	淡黄白	中
「黒 実」	直 立	やや濃緑	中	中	強	散 穂	中	少	中	中	黒 褐	中
「ビクトリー1号」	直 立	濃 緑	中	やや太	中	散 穂	中	少	中	中	淡黄白	中

%程度下回る。幼苗の草型は直立型, 葉幅は中, 穂は開散, 粒形は中, 芒はやや少なく稈色は淡黄白色である(第2表, 第7表, 第8表, 写真)。

2. 耐病性

冠状銹病抵抗性については第3表のとおりで成熟期および稚苗期の調査を総合すると, とくに本病に強

第3表 冠状銹病に対する反応

1) 成熟期における罹病性

供 試 材 料	感 染 型			発 生 程 度			罹 病 度		
	反復1	反復2	平 均	反復1	反復2	平 均	反復1	反復2	平 均
「ホ ナ ミ」	1.0	1.0	1.0	90	100	95	0.8	0.6	0.7
「ビクトリー1号」	1.0	1.0	1.0	70	80	75	0.8	0.6	0.7
「黒 実」	1.0	1.0	1.0	100	100	100	0.8	0.6	0.7

2) 稚苗期における罹病性

供 試 材 料	感 染 型			発 生 程 度			罹 病 度		
	反復1	反復2	平 均	反復1	反復2	平 均	反復1	反復2	平 均
「ホ ナ ミ」	0.8	0.6	0.7	40	40	40	32	24	28
「ビクトリー1号」	0.8	0.6	0.7	10	30	20	8	18	13
「黒 実」	0.8	0.6	0.7	30	40	35	24	24	24

注) 昭和27年 琴似本場にて施行。播種期は 1) は5月21日, 2) は9月9日。調査方法は「小麦品種の銹病程度の調査方法」の基準による。

第4表 葉枯病に対する反応

供 試 材 料	葉 枯 病 罹 病 程 度
「ホ ナ ミ」	少
「ビクトリー1号」	少
「黒 実」	少
「前 進」	中

注) 昭和27年 琴似本場にて施行。

いとはいえない。葉枯病に対しても他の品種とほぼ同様と考えられる。

3. 耐倒伏性

異なつた栽培条件下で調査した倒伏角度と倒伏割合の結果によると, (第5表)「ビクトリー1号」よりも明らかに耐倒伏性が上回っている。本試験では最

第5表 耐倒伏性

1) 倒伏角度

供試材料	標準	多肥	密植	晩播	平均
「ホナミ」	0	40	10	20	17.5
「ビクトリー1号」	40	60	0	10	27.5
「前進」	0	60	0	20	20.0

注) 倒伏角度は株の倒伏部位における主要茎が垂直に対してなす角度で示す(昭和33年)。

強品種「黒実」を供試していないので本品種との対比ができないが、いくぶん劣るものと考えられる。

4. 飼料価値

子実の分析結果によると粗繊維は「前進」に比べ

2) 倒伏割合

供試材料	標準	多肥	密植	晩播	平均
「ホナミ」	0	17	7	7	7.8
「ビクトリー1号」	40	63	0	18	30.3
「前進」	0	50	0	10	15.0

注) 1区8.3m²のうち倒伏角度30°以上を示した株割合(昭和33年)。

てやや少なく、粗灰分は「前進」よりいくぶん多いが「ビクトリー1号」に比べてわずかに下回る。しかしその他の栄養成分はいずれも「ビクトリー1号」および「前進」と大差がない。本品種の飼料価値は、これ

第6表 飼料価値に関する参考成績

1) 試料分析成績

品種名	年次	原物中(%)						無水物中(%)				
		水分	粗蛋白質	粗脂肪	NFE	粗繊維	粗灰分	粗蛋白質	粗脂肪	NFE	粗繊維	粗灰分
「ホナミ」	1958	12.1	12.0	3.5	59.7	9.8	2.9	13.68	3.97	67.84	11.17	3.34
	'59	11.4	11.5	3.6	59.8	10.9	2.8	13.02	4.08	67.47	12.27	3.16
「ビクトリー1号」	1958	11.2	11.7	4.0	59.2	10.5	3.4	13.21	4.51	66.71	11.75	3.82
	'59	11.3	11.7	4.3	58.8	10.6	3.3	13.18	4.77	66.48	11.91	3.66
「前進」	1958	11.6	12.7	3.4	58.6	11.1	2.6	14.43	3.92	66.16	12.64	2.85
	'59	11.3	11.6	3.7	59.8	11.2	2.4	13.05	4.21	67.43	12.58	2.73

2) 飼料栄養価

品種名	年次	可消化粗蛋白質(%)	全可消化養分総量(%)	可消化純蛋白質(%)	澱粉価(%)	IFEに要する重量(Kg)	IFE中の可消化純蛋白質(g)	可消化粗蛋白質(Kg)	アール当			
									標準比(%)	全可消化養分(Kg)	可消化純蛋白質(%)	標準比(%)
「ホナミ」	1958	9.30	62.38	8.19	61.20	1.23	100.32	3.7	105	25.0	101	
	'59	8.85	62.10	7.79	60.81	1.23	96.10	3.4	111	23.9	112	
「ビクトリー1号」	1958	8.98	62.30	7.90	61.00	1.23	97.20	3.6	100	24.7	100	
	'59	8.96	62.57	7.89	61.23	1.22	96.61	3.1	100	21.4	100	
「前進」	1958	9.81	62.02	8.63	60.99	1.23	106.18	3.8	105	23.8	96	
	'59	8.87	62.36	7.81	61.06	1.23	95.93	3.2	106	22.7	106	

注) 当場畜産部元飼料化学研究室の分析成績、消化率はMorrison(1954)による。

ら品種とほぼ同等と考えてさしつかえないものと考えられる。

5. 生産力

当場において1952年から1959年まで8カ年間の試験結果によると、本品種の収量は「ビクトリー1号」よりも8%程度上回るが「前進」よりやや下回る。各種栽培条件を変えた場合の収量結果は第9表に示し

た。これによるといずれの条件下でも、本品種は「ビクトリー1号」より多収を示しており、さらに「前進」に比べても多肥栽培以外はいずれも上回っている。とくに、密植、晩播における安全確収性は他の品種より特段にすぐれているものといえる。道内各試験機関および、現地試験における成績を通覧すると本品種の収量性は「ビクトリー1号」より明らかに多収であり、「前進」に匹敵するものと認められる。

第7表 標準栽培における成績

品 種 名	年次	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂 数 (本/m ²)	倒伏	稿稈収量 (Kg/a)	子実収量 (Kg/a)	左比率 (%)	ℓ重 (g)	粒の 品質
「ホ ナ ミ」	1952	7.10	8.13	118	24.7	207	無	58.0	39.2	104	452	中
	'53	7.9	8.20	108	22.6	180	〃	39.2	32.3	128	446	〃
	'54	7.15	8.23	125	27.2	213	〃	42.8	40.5	103	517	〃
	'55	7.12	8.10	109	23.0	167	〃	54.7	37.1	114	466	〃
	'56	7.9	8.20	125	22.9	153	〃	47.0	38.6	102	500	〃
	'57	7.12	8.21	145	25.2	187	〃	39.0	39.6	102	470	〃
	'58	7.12	8.15	112	24.4	213	〃	42.0	40.1	101	460	〃
	'59	7.8	8.11	117	25.7	169	〃	46.8	38.5	113	497	上
	平均	7.11	8.17	120	24.5	186	〃	46.2	38.2	108	476	中
「ビクトリー1号」	1952	7.9	8.11	126	22.4	213	無	50.1	35.3	100	490	中上
	'53	7.7	8.16	123	20.8	213	〃	36.1	25.2	100	469	中
	'54	7.12	8.20	128	23.5	227	〃	41.7	39.2	100	515	〃
	'55	7.10	8.9	113	20.3	180	〃	50.6	32.4	100	484	〃
	'56	7.9	8.20	113	21.5	153	〃	47.0	37.7	100	498	〃
	'57	7.12	8.16	148	20.4	193	〃	39.4	39.0	100	510	〃
	'58	7.11	8.13	116	20.8	227	中	52.0	39.7	100	467	〃
	'59	7.8	8.7	125	22.4	191	無	39.3	34.2	100	520	上
	平均	7.10	8.14	124	21.5	200	〃	44.5	35.3	100	494	中
「前 進」	1952	7.5	8.8	119	25.1	227	無	49.6	40.4	115	458	中下
	'53	7.7	8.17	121	22.2	173	〃	33.5	35.2	140	477	中
	'54	7.10	8.18	119	26.2	220	〃	40.1	37.8	96	428	〃
	'55	7.9	8.7	110	22.7	160	〃	42.5	36.5	113	499	〃
	'56	7.5	8.17	117	23.7	153	〃	43.0	38.1	101	510	〃
	'57	7.10	8.16	148	20.4	193	〃	39.0	40.8	105	495	〃
	'58	7.9	8.12	106	25.5	207	〃	40.0	38.3	97	497	〃
	'59	7.5	8.6	109	25.1	227	〃	33.0	36.5	107	510	上
	平均	7.8	8.13	119	23.9	195	〃	40.1	38.0	110	485	中

注) 当場における成績。

収量差の統計的有意性は下記品種間で認められた。

1952「ホナミ」*>「ビクトリー1号」

1955「ホナミ」*>「ビクトリー1号」

1958「ホナミ」*>「前進」

第8表 千粒重および稈率

年 次	「ホ ナ ミ」		「ビクトリー 1号」		「前 進」	
	千 粒 重	稈 率	千 粒 重	稈 率	千 粒 重	稈 率
1952	34.1	30.3	34.7	28.2	38.1	33.7
'53	37.3	30.3	40.0	27.6	42.1	32.0
'54	39.4	29.5	38.0	26.8	41.9	33.0
'55	40.2	30.5	41.2	28.0	42.6	32.0
'56	42.3	30.3	44.6	28.0	50.7	33.5
'57	37.3	30.0	38.2	27.0	42.7	33.5
'58	37.0	31.0	36.2	27.3	45.9	32.5
'59	40.2	29.5	38.9	28.0	42.4	32.5
平均	38.5	30.2	39.0	27.7	43.3	32.8

注) 当場の成績。

第9表 栽培条件を異にした場合の成績

栽培条件	品 種 名	年次	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	穂 長 (cm)	穂 数 (本/m ²)	倒伏	子実収量 (Kg/a)	比率 (%)	ℓ重 (g)	粒の 品質
多	「ホ ナ ミ」	1956	7. 9	8.19	131	23.6	167	無	42.4	102	485	中
		'57	7.12	8.19	136	23.1	207	〃	47.3	109	485	〃
		'58	7.12	8.17	118	23.9	233	〃	36.5	100	433	〃
		'59	7. 8	8.11	124	25.3	179	〃	44.1	119	477	上
		平均	7.10	8.16	127	24.0	197	〃	42.6	108	470	中
肥	「ビクトリー1号」	1956	7. 9	8.17	143	22.1	187	無	41.5	100	502	中
		'57	7.11	8.14	137	20.9	213	少	43.4	100	500	〃
		'58	7.10	8.13	123	21.9	207	やや多	36.7	100	433	〃
		'59	7. 7	8. 7	138	22.9	212	少	37.2	100	517	上
		平均	7. 9	8.13	135	22.0	205	少	39.7	100	488	中
栽	「前 進」	1956	7. 6	8.17	127	24.0	160	無	44.9	108	490	中
		'57	7.10	8.14	119	21.7	213	〃	44.3	102	479	中
		'58	7. 9	8.12	109	24.4	227	中	41.2	112	487	中
		'59	7. 5	8. 6	134	26.2	203	少	42.2	113	480	上
		平均	7. 8	8.12	122	24.1	201	少	43.2	109	484	中
少	「ホ ナ ミ」	1956	7.10	8.19	109	22.3	167	無	34.9	110	494	中
		'57	7.13	8.22	107	24.2	153	〃	35.5	102	477	〃
		'58	7.12	8.17	106	23.3	193	〃	36.1	115	460	〃
		'59	7. 9	8.13	104	24.9	179	〃	32.3	111	493	〃
		平均	7.11	8.18	107	23.7	173	〃	34.7	110	481	〃
肥	「ビクトリー1号」	1956	7. 8	8.18	123	20.1	180	無	31.8	100	419	中
		'57	7.12	8.17	115	21.2	187	〃	34.9	100	402	中
		'58	7.10	8.13	112	21.4	180	〃	31.5	100	487	中
		'59	7. 8	8.11	113	23.1	183	〃	29.0	100	527	上
		平均	7.10	8.15	116	21.5	182	〃	31.8	100	467	中
栽	「前 進」	1956	7. 7	8.17	107	24.2	180	無	34.2	108	506	中
		'57	7.10	8.17	104	20.3	173	〃	36.6	105	498	中
		'58	7. 8	8.12	98	24.1	207	〃	35.3	112	520	上
		'59	7. 5	8. 6	103	26.2	213	〃	32.4	112	510	上
		平均	7. 8	8.13	103	23.7	193	〃	34.6	109	509	中上
密	「ホ ナ ミ」	1956	7. 8	8.18	119	22.3	233	無	40.9	111	498	中
		'57	7.12	8.18	112	18.8	367	〃	42.6	111	492	〃
		'58	7.11	8.14	105	20.8	360	少	39.5	114	470	上
		'59	7. 8	8.11	110	22.0	381	無	37.7	110	497	上
		平均	7.10	8.15	112	21.0	335	〃	40.2	112	489	中上
植	「ビクトリー1号」	1956	7. 8	8.17	123	19.1	260	無	36.8	100	515	中
		'57	7.10	8.13	119	19.1	347	〃	38.3	100	498	中
		'58	7.10	8.13	110	19.5	287	〃	34.6	100	500	上
		'59	7. 7	8. 6	119	20.2	335	〃	34.2	100	507	上
		平均	7. 9	8.12	118	19.5	307	〃	36.0	100	505	中上
栽	「前 進」	1956	7. 6	8.15	113	21.4	240	無	37.6	102	521	中
		'57	7. 9	8.11	95	17.8	347	〃	39.8	104	496	中
		'58	7. 8	8.12	98	21.3	353	〃	39.8	115	523	上
		'59	7. 5	8. 6	109	24.3	328	〃	37.2	109	500	上
		平均	7. 7	8.11	104	21.2	317	〃	38.6	108	510	中上

栽培条件	品 種 名	年次	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	穂 長 (cm)	穂 数 (本/m ²)	倒伏	子実収量 (Kg/a)	比率 (%)	ℓ重 (g)	粒の 品質
晩	「ホ ナ ミ」	1956	7.19	8.27	120	23.8	160	無	39.2	114	467	中
		'57	7.18	8.25	116	23.7	140	少	34.7	104	494	中
		'58	7.15	8.20	114	25.4	187	少	33.9	109	450	中
		'59	7.17	8.18	109	22.1	185	少	32.8	123	497	中
		平均	7.17	8.23	115	23.8	168	少	35.2	113	477	中
播	「ビクトリー1号」	1956	7.19	8.22	131	20.8	213	無	34.4	100	479	中
		'57	7.18	8.20	132	23.0	147	中	33.5	100	473	中
		'58	7.15	8.17	119	22.7	200	少	31.2	100	447	中
		'59	7.16	8.16	116	20.5	185	中	26.6	100	527	上
		平均	7.17	8.19	125	21.8	186	少	31.4	100	482	中
培	「前 進」	1956	7.16	8.22	113	24.3	134	無	35.4	103	475	中
		'57	7.16	8.21	118	25.9	140	〃	34.8	104	485	中
		'58	7.12	8.13	105	26.2	200	少	34.4	110	467	中
		'59	7.13	8.15	106	24.6	165	中	34.8	131	510	上
		平均	7.14	8.18	111	25.3	160	少	34.9	112	484	中

注) 当場における成績。

収量差の統計的有意性は下記品種間で認められた。

多肥栽培 1956「前進」**>「ホナミ」 1958「前進」*>「ホナミ」 1959「ホナミ」**>「ビクトリー1号」

少肥栽培 1956「ホナミ」**>「ビクトリー1号」 1959「ホナミ」**>「ビクトリー1号」

密植栽培 1956「ホナミ」**>「前進」, 「ビクトリー1号」 1957「ホナミ」*>「ビクトリー1号」

晩播栽培 1956「ホナミ」*>「ビクトリー1号」, 「前進」 1959「ホナミ」*>「ビクトリー1号」

第10表 道内試験機関における成績

場所名	品 種 名	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	穂 長 (cm)	穂 数 (本/m ²)	倒伏	子実収量 (Kg/a)	比 率 (%)	ℓ重 (g)	粒の 品質
天 北	「ホ ナ ミ」	7.12	8.25	113.3	24.5	333	やや少	36.1	109	414	中下
	「ビクトリー1号」	7.14	8.20	112.3	21.5	367	少	33.4	100	428	中
	「前 進」	7.13	8.19	110.8	24.4	213	やや少	35.7	107	429	中
	「黒 実 1 号」	7.13	8.21	112.4	24.7	333	少	38.4	119	419	中下
十 勝	「ホ ナ ミ」	7.16	8.19	114.4	20.0	293	無	28.1	117	485	
	「ビクトリー1号」	7.15	8.17	117.2	19.5	273	〃	24.3	100	498	
	「前 進」	7.12	8.15	114.5	21.5	293	〃	29.7	121	500	
	「栄 進」	7.15	8.17	114.5	21.1	273	〃	25.6	104	501	
北 見	「ホ ナ ミ」	7.10	8.12	108.0	21.4	340	中	42.0	109	428	中上
	「ビクトリー1号」	7. 8	8.11	114.0	19.7	407	無	38.6	100	464	上下
	「前 進」	7. 7	8.11	104.0	21.6	367	少	43.7	113	444	中上
根 釧	「ホ ナ ミ」	8. 1	8.26	134.1	22.0	260	多	21.2	150	375	上中
	「ビクトリー1号」	7.31	8.28	137.3	20.4	253	〃	14.0	100	378	上下
	「黒 実 1 号」	7.30	8.28	129.4	22.6	240	中	17.6	125	370	上下

注) 試験年次は下記のとおりである。

天北農業試験場 (元 支 場) 昭和29~31年および33年の4カ年平均

十勝 " (") 昭和29~33年の5カ年平均

北見 " (") 昭和30~31年および33年の3カ年平均

根釧 " (元根室支場) 昭和31~33年の3カ年平均

第11表 道内試作地成績(昭和33年)

町村名	品 種 名	子実収量 (Kg/a)	比 率 (%)	概 評	町村名	品 種 名	子実収量 (Kg/a)	比 率 (%)	概 評
鹿 追	「ホ ナ ミ」	26.0	116	◎	紋 別	「ホ ナ ミ」	37.4	111	◎
	「ビクトリー1号」	22.4	100			「ビクトリー1号」	33.6	100	
	「前 進」	25.9	116			「前 進」	31.1	92	
	「勝 冠 1 号」	16.2	72			「北 洋」	35.1	104	
池 田	「ホ ナ ミ」	27.7	104	◎	滝ノ上	「ホ ナ ミ」	23.6	81	▲
	「ビクトリー1号」	26.7	100			「ビクトリー1号」	29.3	100	
	「前 進」	25.4	95			「前 進」	23.8	81	
				「北 洋」		24.6	84		
豊 頃	「ホ ナ ミ」	14.4	117	◎	佐呂間	「ホ ナ ミ」	35.6	111	◎
	「ビクトリー1号」	12.3	100			「ビクトリー1号」	32.0	100	
	「前 進」	13.5	100			「前 進」	34.3	107	
				「北 洋」		34.5	108		
本 別	「ホ ナ ミ」	23.7	113	◎	斜 里	「ホ ナ ミ」	33.0	107	◎
	「ビクトリー1号」	21.0	100			「ビクトリー1号」	30.9	100	
	「前 進」	23.2	111			「前 進」	33.5	108	
	「勝 冠 1 号」	19.1	91			「北 洋」	30.9	100	
弟子屈	「ホ ナ ミ」	18.0	109	◎	津 別	「ホ ナ ミ」	30.8	105	○
	「ビクトリー1号」	14.3	100			「ビクトリー1号」	29.3	100	
	「黒 実 1 号」	17.8	105			「前 進」	31.7	108	
				「北 洋」		29.4	101		
苫 前	「ホ ナ ミ」	38.6	106	◎	常 呂	「ホ ナ ミ」	33.5	92	▲
	「ビクトリー1号」	36.4	100			「ビクトリー1号」	36.6	100	
	「前 進」	36.4	100			「前 進」	46.4	127	
				「北 洋」		39.3	107		
中屯別	「ホ ナ ミ」	26.4	118	◎	美 幌	「ホ ナ ミ」	34.1	123	◎
	「ビクトリー1号」	22.4	100			「ビクトリー1号」	27.8	100	
	「前 進」	25.3	113			「前 進」	23.0	83	
				「北 洋」		25.2	91		
神 楽	「ホ ナ ミ」	31.9	103	◎	狩 太	「ホ ナ ミ」	40.9	111	◎
	「ビクトリー1号」	31.0	100			「ビクトリー1号」	36.8	100	
	「前 進」	31.9	103			「前 進」	22.9	62	
	「北 洋」	21.2	69			「黒 実 1 号」	36.8	100	
南富良野	「ホ ナ ミ」	45.6	109	◎					
	「ビクトリー1号」	42.2	100						
	「前 進」	44.9	107						
	「北 洋」	41.0	98						
士 別	「ホ ナ ミ」	37.7	114	○					
	「ビクトリー1号」	33.2	100						
	「前 進」	39.2	118						
	「北 洋」	41.7	126						

注) ○「ビクトリー1号」にまさる。◎「ビクトリー1号」「前進」にまさる。▲「ビクトリー1号」におとる。

IV 適地および栽培利用上の注意点

本品種は北海道一円に好適し地域適応性が広く、地力の低い所でも、かなりの収量が期待できる。(第11表, 第1図)穂数が少なく密植適応性が高いので播種量はやや多くした方がよい。銹病発生のはなはだしい

地帯あるいは強度の耐倒伏性を求める場合は、むしろ他の限定品種を用いた方がよいであろう。また本品種は「前進」、「ビクトリー1号」に比べて晩生であるので、これら品種と適宜配合すれば収穫期の労力配分に役立つであろう。道内の適否試験を含めて収量成績を総合すると、本品種は全道的に「ビクトリー1号」

を上回っており、また、ところにより「前進」にまさっている。このことから「ビクトリー1号」は全面的に本品種と置き換えることが可能であり、多収性品種「前進」の一部もこれと置き換えてさしつかえないものと考えられる。

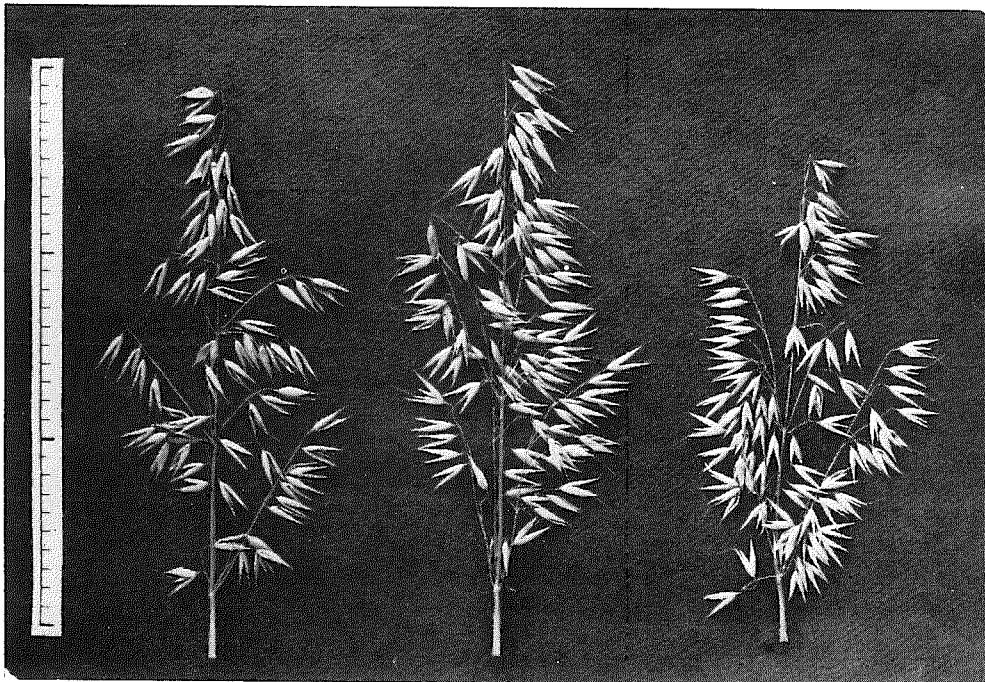
V 摘 要

1. 北海道一円に栽培されるえん麦の代表品種「ビクトリー1号」の改善を目的として育種計画が立てられた。

「ホナミ」は、1942年（昭和17年）に「黒実」を母として、「ビクトリー1号」を父として交配、以後系統育種法により札幌農事改良実験所および、当場で育成が進められ、昭和34年11月新品種に登録された品種である。

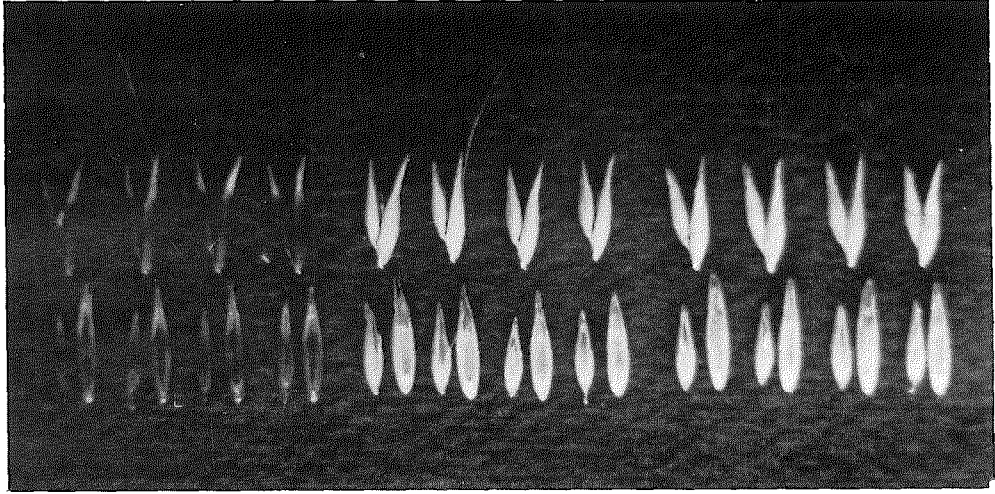


◎ 101%以上 ▲ 100%以下
第1図 北海道各地における「ホナミ」の収量比較

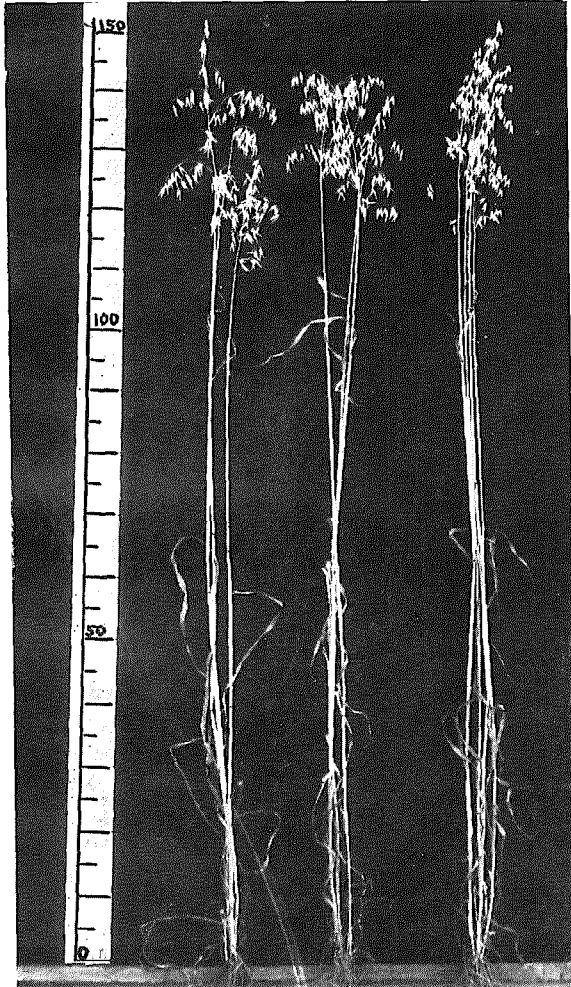


「黒 実」 「ホ ナ ミ」 「ビクトリー1号」

写 真 1. 「ホナミ」と両親品種の穂型比較



「黒実」 「ホナミ」 「ビクトリー1号」
写真 2. 「ホナミ」と両親品種粒型比較



「黒実」 「ホナミ」 「ビクトリー1号」
写真 3. ホナミと両親品種の草本比較

2. 「ビクトリー1号」に比べると稈長はやや短い
が、穂が長く、小穂数が多く、千粒重は小である。穂
型は開散、粒着は密、稈色は淡黄白色、粒形は中で、
芒は少ない。成熟期は「ビクトリー1号」より2〜3
日おそい。冠状銹病、斑葉病にあまり強くない。耐倒
伏性は、「ビクトリー1号」にまさる。

3. 収量は「ビクトリー1号」より高く、「前進」
と同等か、やや劣る。少肥晩播における減収程度が少
なく、多肥密植においてもかなり高い適応性を示す。

4. 北海道一円に好適し、地域適応性が広く地力瘠
薄な所でも、かなりの収量確保が可能である。代表品
種「ビクトリー1号」は全面的に本品種と置き換わり
また現在最も普及面積の大きい多収性品種「前進」の
一部もこれと置き換わるものと考えられる。

Résumé

Oat breeding in Hokkaido lays stress on the introduction of dominant factors for high standing ability. The present breeding program was planned with the aim of improving the defects of "Victory No. 1", which has been distributed as a leading variety throughout Hokkaido.

"Honami" was registered as a recommended variety of oats for most of Hokkaido in 1959. This variety was developed at the Hokkaido Agricultural Experiment Station, Kotoni, from a cross of "Kuromi" X "Victory No. 1".

"Honami" is shorter in culm length, longer in panicle length, greater in number of

spikelets and smaller in weight per 1000 kernels than "Victory No.1". The form of panicle is spreading, density of kernels is greater, color of hull is yellowish white, size of grain is intermediate and extent of awing is designated as slight. The time of maturity of this variety is about two or three days later than that of "Victory No.1". The variety is susceptible to crown rust and leaf-spot diseases. The lodging resistance of this variety is much higher than that of "Victory No.1".

As for yield, "Honami" is consistently higher than "Victory No.1" in most areas and equals "Zenshin" in some areas. This variety shows high adaptability to small applications of fertilizer and later seeding, as well as to heavy applications and dense planting. "Honami" is well adapted to the greater part of Hokkaido. The variety may produce well even in areas with low soil fertility levels. "Honami" can be replaced mostly by "Victory No.1" and partly by "Zenshin", a high yielding variety.